近代舞踊における ディレッタンティズムの 果たした役割について

— ニーチェの警告との関連 —

丸 子 睦 美

本論は，ニーチェの〝Die Geburt der Tragödie〟がイサドラ・ダンカンに与えた理論的影響と，芸術のポジティヴな意味での[1]ディレッタンティズムについて述べるものである。これはニーチェのその書が近代舞踊革命の烽火を上げたダンカンの[2]バイブルであることからしても無視できない問題であると思われる。

ここで注目しなくてはいけないことは，〝Die Geburt der Tragödie〟がニーチェを学会から破門させたということである。そして，同書から深い感銘を受けたダンカンはといえば，いわばその全生涯がSturm und Drang状態の芸術家であった。改革者たる栄冠を手にする為には，可能な限りアカデミーや流派にコンプレックスを持つか憎悪していなくてはならない。その点に於いてダンカンはまさに格好の人物であった。

今世紀初頭に現われて，アイデアのみを武器に新しい舞踊スタイルを提唱した改革者達をクルト・ザックスは，[3]≪しばしば自己主張のみが強くて，あまりに貧弱な力量しか持たなかった・・・・彼等は学んで修得するということができなかったのである≫と言っている。しかし，私は彼等のよりポジティヴな舞踊史的意義を認めたいと思う。

ニーチェは〝Die Geburt der Tragödie〟の中で次のように述べている。[4]≪認識は行動を殺す。行動する為には幻覚のヴェールに包まれていなくてはならない・・・・真の認識，恐るべき真理の洞察，これらが人間を行動へと駆りたてるあらゆる動機を押し殺してしまうのだ。≫

つまり，これは逆説的には，認識していなければこそ行動できるということになる。彼は，[5]≪英知は自然に対する犯罪だ≫という句さえ用いている。

そうはいうものの，ニーチェ自身は古典文献研究家として早くから偉大な業績を修め，わずか25歳にして異例の昇進でバーゼル大学の正教授になった。アカデミズムの世界の人間である彼が持つ≪認識≫に対してのこの見解はダンカンのニーチェ体験の上で重要な点である。そして，そのことがまた同時に非アカデミズムの世界の人間でありながら常にアカデミズムの裏付けを求めようとしたダンカンの心に深く作用していたことが考えられる。ニーチェはソクラテス，アリストテレス以降の弁証法的合理性や近代理念に憎悪の念を抱いていた。つまり，知りつくした上で弁証法を否定し，芸術を哲学や学術の上に位置するものであると主張したのがニーチェであったとすれば，知りつくしていなかったからこそアカデミズムの臭いのするものに飛びついたのがダンカンであったと言える。したがって，この点においてダンカン芸術の理論的成立過程はディレッタントのそれである。まず，アカデミズムの中で過ごしたことが一度もなかったのにも拘らず，自己の芸術論の思想的背景を[6]カント，ショーペンハウアー，ニーチェ，プラトン，ゲーテ，シラー，ダンテ，ワーグナーに置いたダンカンの研究方法，理解度，はたまた言語の問題には疑問がある。

しかも，ここに大きな矛盾がある。ダンカンはギリシア悲劇にイデアを置いて自己の芸術論を展開させた。それなのに[7]プラトンの名が登場するのはどのようなわけなのか。ダンカンはニーチェがいかにソフィストを非難しているかを承知しているはずである。なぜなら〝Die Geburt der Tragödie〟の大部分はソクラテスと結託したエウリピデスとその一派の非ディオニュソス的傾向に対する非難，分析になっているからである。ソフィスト流弁証法の本質に[8]楽観主義的要素を見い出し，ディオニュソス的悲劇芸術を崩壊させた要因とし，ニーチェはほとんど嘆きにも等しい口調で強調している。それをダンカンが見逃すとは思えない。プラトンはソクラテスの弟子になる為に，まず悲劇詩人であることを断念し，詩作品を焼き捨てた。したがって，プラトンはソクラテスと同様，まさに悲劇芸術の敵でこそあれ，ダンカンが自己の芸術論のよりどころとするような思想家では到底あり得ない。プラトン哲学で精神を養おうとする限り，〝Die Geburt der Tragödie〟をバイブルとすることには矛盾がある。または，ダンカンにとっては名の通った思想家でありさえすれば誰でもよいのだろうか。2,000年間その名声が消えなかったような人物を理論的背景として出せば，自己の芸術論に箔がつく。もしその程度の理由からプラトンを入れたとすれば，かえって彼女の理論にとって致命傷になることは明白である。

ニーチェからダンカンが受けた最大の財産はディオニュソスであった。そして，ディオニュソス的陶酔のもとにのみ生まれるもの及び張消しになるところの存在もバイブル〝Die Geburt der Tragödie〟は克明に記していたのである。実はこの張消しになるところの存在というのが一番問題なのである。なぜなら，この点こそ近代舞踊の出発点であると同時に本質だからである。

[9]≪原始的人間を生まれながらにして善良かつ芸術的な人間であるとみなす人間解釈・・・・善良なる原始人が自己の権利を主張する・・・・芸術無能力者が一種の芸術をつくり出す，ほかでもない，彼が非芸術的な人間そのものであるという理由によって

・・・・感受性のある人間であれば誰でももともと芸術家なのだという牧歌的な信仰である・・・・楽園的善良さと芸術的天性というかたちの，人類の理想を達成していた原始時代がかって存在していたのか。≫

アポロ的美の世界に対して改革者は自然の存在に目を開いた。あたかも自然という言葉の前には全てが正当化され，自然の寛大さのもとではいかなる人間的な評価の基準も消え失せることを知っているかのように，ニーチェの明晰さが下した善良な原始人に対する判決はワーグナーのMusikdrama以前のOperに対するものであったのに，皮肉なことにも彼の擁護しようとしたものにも該当した。事実それは表裏一体をなしていた。したがってワーグナーとの決裂後それが激しい攻撃に化したのである。そして，それは，ニーチェの理論的信奉者であり，彼の著作をバイブルと仰ぐダンカンにも当てはまるものであった。

ダンカンの[9]天才的なものにまで徹底したディレッタンティズムは，ドイツがまさに古典舞踊芸術のディレッタントであるという理由によって開花したのである。ショーペンハウアーはこうは言わなかったであろうか。≪[10]おお，あんなに少ししか読まなかったからにはさぞかし奇抜なことが考えられるに違いない。≫

以上，筆者の独断による考察の為，甚だ公正を欠く箇所もあると思うが，至らない点は今後の研究課題にしてゆきたいと思う。

注 1. ディレッタンティズム擁護論については「総合芸術におけるディレッタンティズムについて」丸子睦美：報告15号，昭和55年東洋出版。ディレッタンティズムの利点，欠点については Johann J. W. Goethe "Über den Dilettantismus" Ges. Bd. 144 Arthemis. Zürich 1964 を参照。

2. Duncan, Isadora: "A Letter to the Pupils" The Art of the Dance. New York 1977 P.108

3. Sachs, Kurt: World History of the Dance. New York 1963, P.447～448

4. Nietzsche, Friedrich: Die Geburt der Tragödie. Werke in 3 Bd. Bd. 1 München 1954 S.48

5. ibid. S.57

6. Duncan: The Art of the Dance を参照。

7. ibid. P.108

8. Nietzsche, ob cit. S.106

9. トーマス・マンがワーグナーのディレッタントぶりを称した時の表現であるがここではダンカンに用いた。Mann, Thomas: Ges. Bd.9 Hamburg 1960, S.376

10. Schopenhauer, Arthur; Sämtl. Werke Bd.2 Wiesbach 1947, S.510, "O, wie wenig muß doch einer zu denken gehabt haben, damit er so viel hat lesen können!" を逆説的に用いた。